フチトリヒメヒラタタマムシ龍野市内に産す

（兵庫県甲虫相資料・225）

高橋寿郎

フチトリヒメヒラタタマムシ Anthaxia rubromarginata Miwa et Chûjô は1935年松村松年博士が札幌円山にて、1918年5月31日採集された標本に基づいて、三輪勇四郎・中條道夫両博士によりヒメヒラタタマムシ Anthaxia proteus Saunders の変種として原色図をつけて記載された種である（昆虫界 Vol. 3, No.17, p.276, pl, 105, fig. 7, 1935）。その後両博士による"日本産鞘翅目分類目録、Part. 1. 吉丁虫科、1936"の中でも（p.39）同じく変種扱いにされ、分布を北海道としている。

1948年には黒沢良彦博士により"日本産 Anthaxia 属に就いての覚書"と言う論文（Ent. Rev. Vol. 1, No.1 p.1—4, 1948）の中で、フチトリヒメヒラタタマムシとして新しく和名を与えられると共に独立種にとり扱われ、三輪・中條両博士が1935年にはこれまたヒメヒラタタマムシの変種として記載された（札幌産）viridomarginata Miwa et Chujo もフチトリヒメヒラタタマムシのシノニムであるとされ、アムール地方から記載された A. prinorjensis Obenberger, 1938 もシノニムであるとされた。そして、このフチトリヒメヒラタタマムシは本州にも稀であるが、産するとされ黒沢博士は山形市盃山1♂と伊賀正汎氏が大阪府妙見山の1頭を検されたと言うことに言及され、同時に朝鮮忠清北道清州産の1頭を検し得たとされている（上記大阪府妙見山産は1955年に出版された原色日本昆虫図鑑甲虫編の中で伊賀氏により、原色図説されている。pl. 23, f. 491, p.76. 採集は1943年5月となっている）。

1970年黒沢博士による"日本産タマムシ科解説（7）"の中で本種は Subgenus Haplanthaxia Reitter, 1911 ヒメヒラタタマムシ亜属に属する種として解説され、"日本では稀でクヌギ、クリ、アベマキ、コナラなどに来集する"とされている（甲虫ニュース, No. 9, p.3—4）。

原色図説は夫々原色昆虫大図鑑第2巻（甲虫編）（pl. 77, f. 31, p. 154, 1963）、原色日本甲虫図鑑（Ⅲ）（pl. 2. f. 10, p. 10, 1985）の代表的図鑑に出ている。可成りはっきりした色彩をしているので、まず同定を間違うことはないと考えられる。

分布は北海道、本州、九州、対島、朝鮮半島、シベリア東部とあり可成り広く産するようである。日本ではどの様に産地が知られているのか、一々文献をチェックしてないのでわからなかった。ただ、

そんなに普通にいるタマムシではないのではと思われる。

さて、兵庫県下での本種の記録はと見るに、筆者が調べた範囲では仲田元亮氏による川西市大和（1ex.，7—Ⅵ—1968，仲田，1978，1982）の産地が知られているだけであった（他に記録があれば御教示頂ければ幸いである）。

1988年6月月4日蜂谷幸雄氏は、龍野市神岡町で野バラの花に来ている多くのヒメヒラタタマムシに混じって本種の2♂1♀を採集された（標本全部筆者保管）。県下の記録がほとんど無い様な状況であるので、此処に新産地として報告しておきたい。クヌギ、アベマキなどにつくとあるが（黒沢，1985）ヒメヒラタタマムシ属のものは、成虫が花に来ることが多いことは良く知られていて、ヒメヒラタタマムシなども花で多く採集出来る。それらに混じってどうもいる様なので、ヒメヒラタタマムシが普通種なるが故に見落されているのではないかと思われる。もっと注意すれば産地はふえるのではないかと考えられる。

ムネアカセンチコガネの記録

（兵庫県甲虫相資料・226）

高橋寿郎

前号（第16巻、第2号）に“神戸市内産のムネアカセンチコガネ”と題して神戸市内産を中心にした記録を発表させて頂いたが、その後2～3の会員の方々から県下での本種の記録を御教え頂いたので、此処にまとめて報告しておく。

新家　勝氏より

神戸市東灘区青木一丁目新明和工業構内の大型照明燈の下で、朝の出勤時路上でもがいているのを採集された由（7—Ⅵ—1969）。

西　隆広からは

芦屋市教育研究所指導主事の古市景一氏の標本の中に、芦屋市立山手中学校で採集されたムネアカセンチコガネがあった由。さらに、永幡嘉之氏からも1980年代に三木市、養父郡氷の山、多可郡加美町で採集しているとの連絡を頂いた。